

日本社会福祉学会第64回春季大会（2016年度）

# 福祉哲学の継承と再生

## —福祉哲学と社会福祉学—

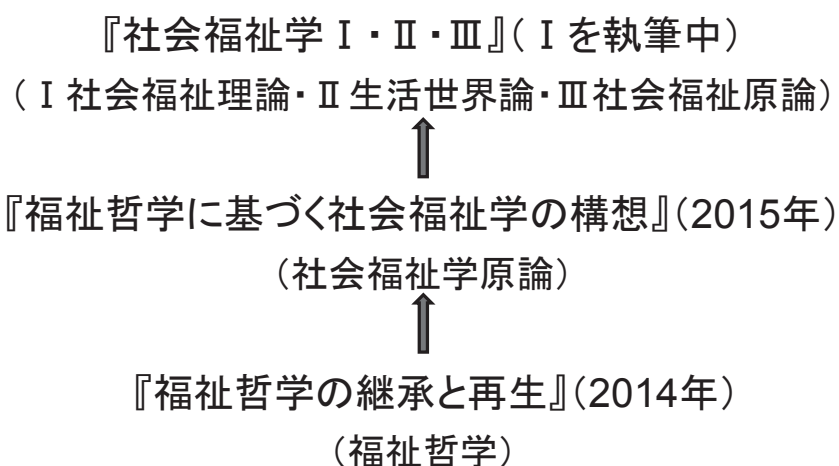
中村 剛（関西福祉大学）

### I. 講演の目的

1. 福祉哲学とはどのような「知的営み」であるのかを説明する。
2. 福祉哲学を基盤とすることで社会福祉学は構築されることを説明する。

## Ⅱ. 講演の内容

### 1. 私の研究プログラムにおける本研究 (『福祉哲学の継承と再生』)の位置づけ



### 2. 『福祉哲学の継承と再生』 (2014, ミネルヴァ書房)のエッセンス

#### (1) 福祉哲学という言葉の意味(規約定義)

福祉哲学とは、社会福祉とは何かを根本(超越論的次元)から問い考える営みである。

#### (2) 問題意識と目的

問題意識: どうすれば福祉哲学をすることができるのか?

目的: 「こうすれば福祉哲学をすることができる」というプロセスを提示・実践(哲学)することを通して、福祉哲学を継承し、それを今日において再生すること。

(3)福祉哲学の出発点：哲学をはじめ学知においては、  
最初の一步が決定的に大切である。

①私の社会福祉の経験

最重度といわれる知的障害がある人への支援を5年10年  
としていく中で、呼びかけのようなもの、それに応えなければ  
という責任のようなものを感じた。それは何なのか。

②2つの世界観(図1, 図2)／私たちが生きている

世界には「死」と「時」がある。

私は、私が生きている世界の外部(俯瞰的視点)には  
立てない。この私が現に生きている現実から問いを考える。  
その世界には「死」があり「時」がある。すなわち、図1でなく、  
私は図2の世界を生きている。

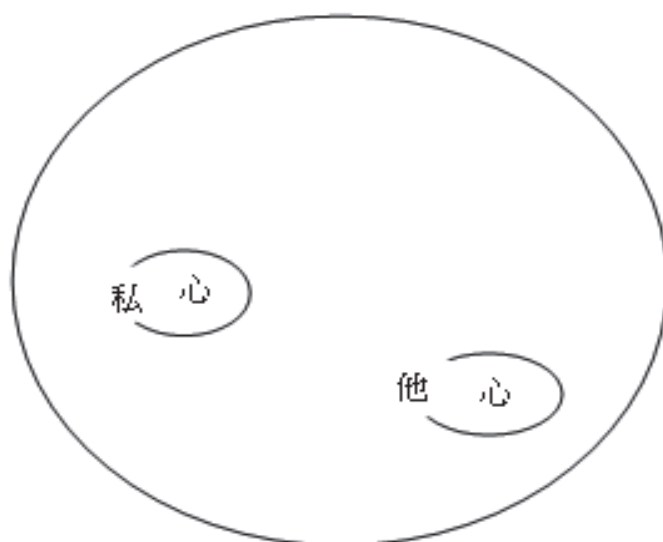


図1 私たちが生きている世界

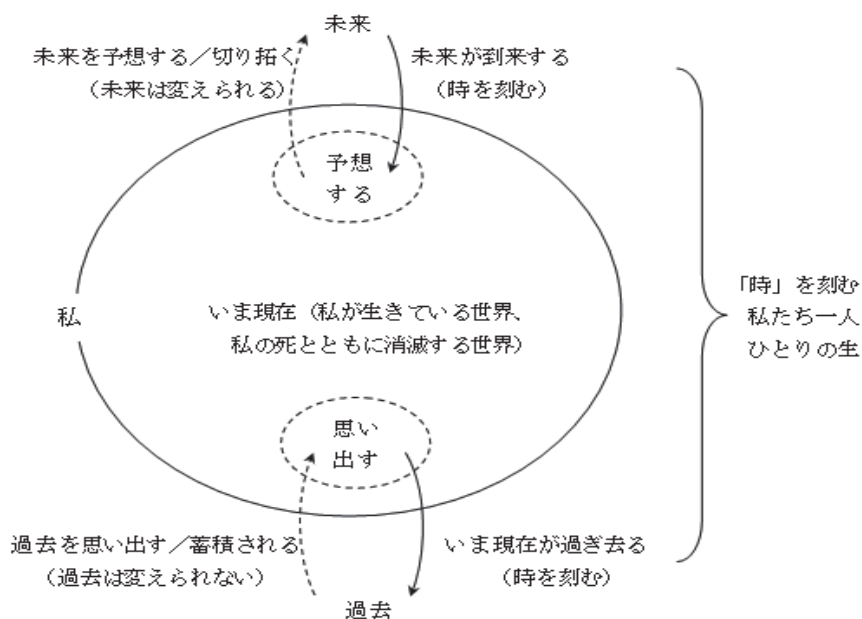


図2 「死」と「時」がある私たちが生きている世界

### ③超越している「世界そのもの」や「過去そのもの」 「未来そのもの」

私は、私の死と共に消滅する世界を生きている。私が死に、私の世界が消滅しても世界そのものは消滅しない。しかし、誰も自分が死んだ後の世界(世界そのもの)を経験できない。私が、「私の世界」しか生きることができないのと同様に、私は「今」しか生きることができない。過去は思いだされる記憶であり「過去そのもの」は経験できない。

④超越論的次元—私たち（人間）が考えることができる最も根本的な次元

超越している「世界」、「時」、「他者」が、どのようにして「この私が生きている世界に立ち現れるのか」を解明するのが超越論的次元である。

現象学はその次元を切り拓いた。

(4)福祉哲学という営み

—社会福祉の経験を学び直す循環運動— (図3)

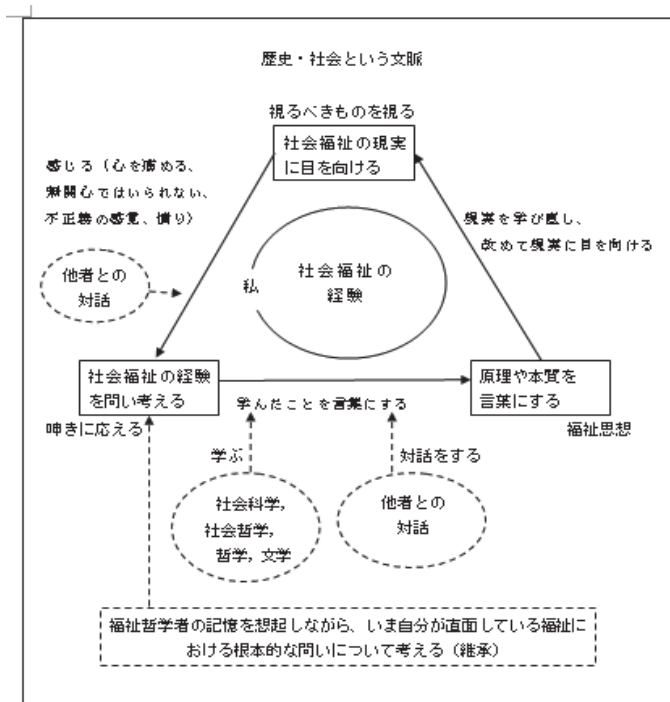


図3 福祉哲学という営み—社会福祉の経験を学び直す循環運動—

### ① 見るべきものを見る（小倉襄二先生からの学び）

「見るべきもの」とは社会の最底辺であり、人間としての扱いを受けていない状況を意味する。

「見る」とは、最底辺に身を置き、そこで暮らす人と関わり、共に生きることを意味する。

## ②呻きに応える（阿部志郎先生からの学び）

視るべきものを視たときに、そこには、「イヤだ」「やめて」「殺さないで」「人間らしく生きたい」という声や、声にならない声が発せられているのに気づく。そうした声は、それを聴いた者の責任を喚起するが故に、実践へと駆り立て、あるいは実践を継続していく根拠となる。こうした声をダーバール（神の言葉、神のようなものが発する言葉）という。

## （5）福祉哲学とは何か（本質定義）

ダーバールに気づき、その声に応えながら、そこで発せられている「問い」について、根本的な地点から徹底的に考え続けることで、社会福祉の経験を学び直すことが福祉哲学である。福祉哲学によって理解されたことを体系的に言葉にしたものが福祉思想である。

### 3. 『福祉哲学に基づく社会福祉学の構想 —社会福祉学原論—』(2015, みらい)

#### (1) 社会福祉と社会福祉学の根源にあるもの

社会福祉という営みや社会福祉という学知に限らず、この世界には「秩序」がある。そうした秩序・言葉・論理をロゴスという。ロゴスを純化した言葉が数学である。しかし、福祉哲学をした結果理解したことは、「私たちが生きている世界の根源には、人を衝き動かす声(呼びかけ)であり、それを聴いた者を実践へと駆り立てるダーバール(言葉=出来事=歴史)がある」ということである。

ダーバールを純化した言葉が、虐げられた人たちの声である。科学はロゴスによって構築されるが、社会福祉学はダーバールとロゴスの双方によって構築される。そこに社会福祉学の固有性がある。



## (2) 根源にあるものを理解する人間の力

古代ギリシアから中世まで、知性—理性—感性という階層性があり、知性が最も高い地位にあった。

知性は本質的なもの・真理・大切なものを直観的に掴む能力であり、理性は論証や計算する力である。

しかし、カント以降、理性—悟性(知性)—感性という入れ替えが起こり、知性が衰退していった。

福祉哲学の先覚者である阿部志郎先生や小倉襄二先生は、知性により、本質的なものや大切なことを直観的に掴み、それを言葉にしている。

## 4.『社会福祉学 I・II・III』

(社会福祉理論・生活世界論・社会福祉原論)

### (1) 社会福祉全体の枠組みに関する仮説

社会福祉の本質および全体像は、図4のように、一人ひとりが生きている世界を生み出す仕組みである超越論的次元、一人ひとりが生きている世界である生活世界の次元、そして、社会福祉という秩序であるシステム次元、この3つの次元により理解される。

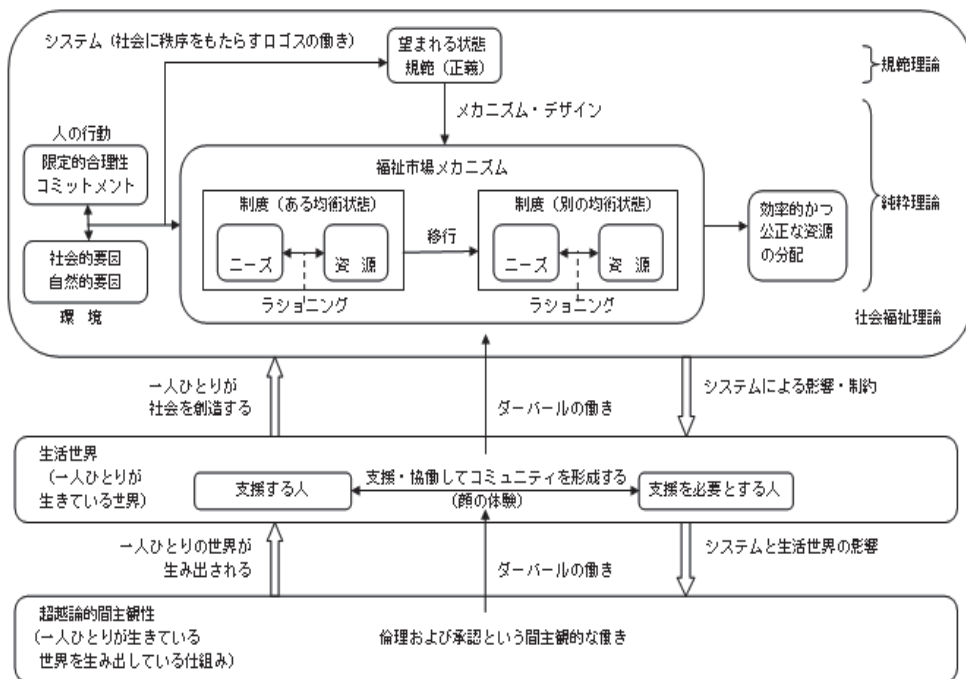


図4 社会福祉モデルに関する仮説

## (2) 社会福祉理論の枠組みに関する仮説

システム次元において社会福祉を理解する理論的枠組みが図5である。

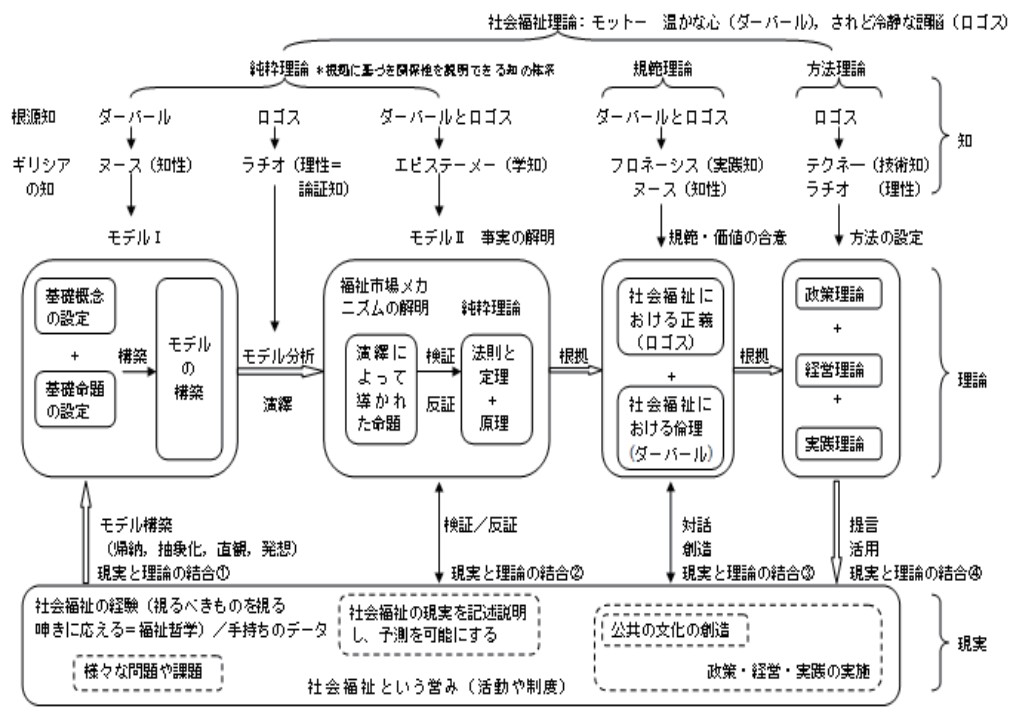


図5 社会福祉理論に関する仮説—現実と知（理論）の循環—